岩手・胆沢（いさわ）城跡

1 所在地　岩手県水沢市佐倉河字渋田ほか
2 調査期間　一九八九年（平1）六月～八月
3 発掘機関　水沢市教育委員会
4 調査担当者　佐久間　賢
5 遺跡の種類　城柵官衙跡
6 遺跡の年代　九～一〇世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

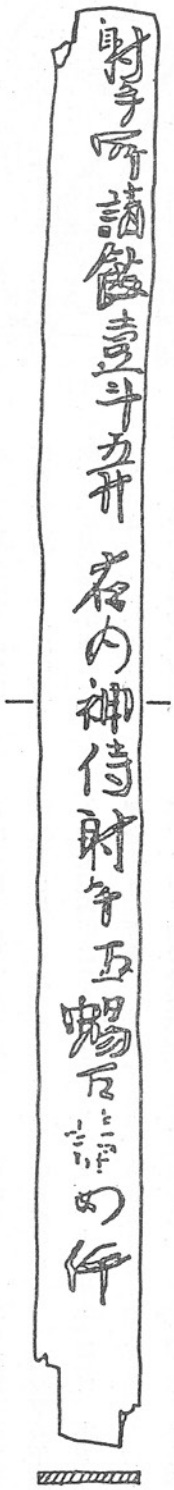
胆沢城跡は、水沢市街地の北東約四km、北上川と胆沢川の合流地南西岸に位置している。これまでの発掘調査により、方約六七五mの築地と内外溝により区画される外郭線、その中央南寄りに、方約九〇mの政庁跡が確認されている。

（北　上）

第五九次発掘調査は、掘立柱列が区画する政庁内西北隅地区を対象に実施した。政庁跡の構造については、既に、正殿、東脇殿、南門、東門、北辺建物が検出され、全体で六期の遺構変遷が確認されている。今回政庁区画北西隅の確認と、正殿北西地区での建物跡の有無の確認を目的として調査が実施された。

調査の結果、北辺区画の掘立柱列（三期重複）とその内外の溝、西北建物にあたる掘立柱建物三棟以上、その他土坑、小柱穴などが発見された。西北建物の最も古いSB二〇〇一は南北三柱間（約六m）、東西五柱間（約一五m）。二期目の建物SB二〇二二は、梁行二柱間（約四m）、桁行二柱間（約四m）以上の南北棟で、東に一柱間（約二・四m）の廂状施設が付く構造と解されるが、南端が調査区外にあり詳細を確定出来ない。三期目の建物SB二〇〇三は、東西三柱間（約六m）、南北二柱間以上の建物である。なお、建物SB二〇〇一と建物SB二〇二二は、その変遷過程に土坑SK二〇〇八が存在している。また、建物SB二〇二二と建物SB二〇〇三は重複する位置に柱列が存在するが、明確な前後関係を把握出来ない。

木簡は、北辺区画内溝から二点出土している。これらの木簡は、深さ〇・五m前後の溝底に近い層中で、木片や用途不明木製品とともに発見された。溝の状況は、上部堆積土に一〇世紀前半の中葉頃に降下したと考えられる灰白色火山灰が積もり、木簡投棄の下限が一〇世紀前半にあることを示す。また、木簡伴出遺物は、須恵系土器を主体に瓦を含むものであり、九世紀末を上限とする。したがって、この木簡の投棄年代は九世紀末から一〇世紀前半の中葉と判断



される。

木簡が投棄された時期の政庁および周辺官衙の状況は、政庁区画、主要殿舎が機能し、特に、昭和六一年度第五二次調査検出の府庁厨屋、昭和六三年度第五四次調査検出の中郭南門が存在している。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「射手所請飯壱斗五升　右内神侍射手□〔巫〕蝪万呂□□□〔請如件〕」

310×21×2　011

9 関係文献

水沢市教育委員会『胆沢城跡平成元年度発掘調査概報』（一九九〇年）

（佐久間　賢）